唄

林檎の木に　赤い実の
熟れてゐるのを　私は見た
高い高い空に　鳶が飛び
雲がながれるのを　私は見た
太陽が　樹木のあひだをてらしてゐた

そして　林のなかで　一日中
私は　うたをうたつてゐた
《ああ　私は生きられる
私は生きられる……
私は　よい時をえらんだ》

「唄」昭和十三年同人雑誌『こをとろ』十一月号に発表された。この詩は彼が好んで用いたソネット形式ではなく、簡潔に心象風景を展開して、しかも道造の特徴である音楽性も巧みに発揮している。

第一連、都会と違う清澄な空気、熟れた赤い林檎の実、高い空の一羽の鳶、流れる雲の描写には、彼の盛岡での体験が背景として考えられる。彼はこの年九月下旬、東北への旅に出、深沢紅子の好意で盛岡の深沢家に滞在、香ばしい林檎と葡萄の豊かな実りの季節に出会った。彼は東北の人の暖かい人情と風景に心を温められた体験を次のように記している。

「追分でぼくは不毛の美しさということを知った。そしてそれをなによりも信じた。今ここでぼくはFruchtbarkeitの美しさというものをはじめて学ぶ。葡萄園の甘いにおいにみちた緑、木の枝に赤く熟れた林檎、そしてそれらがつづいているちいさい丘、それが夕陽をうけるとき土が赤くかがやく。ぼくにははじめてひらけた美しさだ」（「ノートV」）

第二連、彼のような病弱の身が、大自然の実りの美しさに触れて、生きる意志を得た喜びを、祈りのように告げている。

長い間堀辰雄をはじめ『四季』の詩人たちに養われた彼の詩才は、ここにきて、はじめて彼の資質の輝かしさを発揮し、高次の詩の実りを得たといえよう。

燕の歌

春来にけらし春よ春
まだ白雪の積れども
——草枕

灰色に　ひとりぼつちに　僕の夢にかかつてゐる
とほい村よ

あの頃　ぎぼうしゆとすげが暮れやすい花を咲き
山羊が啼いて　一日一日　過ぎてゐた
やさしい朝でいつぱいであつた——

お聞き　春の空の山なみに
お前の知らない雲が焼けてゐる　明るく　そして消えながら
とほい村よ

僕はちつともかはらずに待つてゐる
あの頃も　今日も　あの向うに
かうして僕とおなじやうに人はきつと待つてゐると

やがてお前の知らない夏の日がまた帰つて
僕は訪ねて行くだらう　お前の夢へ　僕の軒へ
あのさびしい海を　望みと夢は青くはてしなかつたと

「燕の歌」と「静物」には、三好達治の詩「燕」の幾分かと、堀辰雄の詩想の幾分かが混じり合っている。「待つ」ということばには、若い日の夢が青い遠方に幻想されていることが示される。

「燕の歌」は昭和十年『四季』三月号に、「静物」は同年同誌四月号につづけて発表された。「静物」の詩情からは、中世のウィーン郊外の田舎町など想像されて、たいへん優雅な西洋画のような小品である。